

「人類社会の進化史的基盤研究（1）」（2007年度第3回研究会）

日時：2007年11月4日（日） 午後1時～6時半

場所：AA研小会議室（302）

内容：1. 中川尚史（AA研共同研究員、京都大学）

「霊長類における社会構造と行動の種内変異-遺伝的変異をともなうか否か」

2. 曾我亨（AA研共同研究員、弘前大学）

「人類の進化史的基盤の考え方-集団という現象にひきよせて」

1. 「霊長類における社会構造と行動の種内変異-遺伝的変異をともなうか否か」

中川尚史（京都大学）

本発表では、私が現在取り組んでいる霊長類における社会構造と行動の種内変異に関する3つの研究を紹介し、それぞれに異なるメカニズムが働いて変異が生じているであろうことを指摘する。

ひとつめは、パタスマンキー（以下、パタス）における順位序列の種内変異について。集中分布した食物に依存するために食物を巡っての敵対的交渉が頻発するカメルーン・カラマルエのパタスでは雌間に安定した直線的順位序列が認められるのに対し、分散した食物に依存するケニア・ライキピアのパタスではそれが認められない。この結果は、雌間の順位序列が食物の分布様式に応じて適応的に決定づけられると予測した社会生態学モデルと見事に合致する。しかし社会生態学は、「環境への社会的適応と社会的形質を生み出す自然選択の働き方を調べる学問」（Goss-Custard et al., 1972）であるから、遺伝的組成が他とは大きく異なる種を分析の単位として同属異種間比較を通じてそのモデルが検証されてきた。ところが、本研究のようにパタスという同一種内の個体群間で同様の適応的な差が認められた場合には、遺伝的変異を伴うか否か、言い換えれば進化の結果か否かはすぐさま結論づけることはできない。実際には、野生状態で直線的順位序列が見られない種を食物が集中分布する状況で飼育したとしても、直線的順位序列が認められるようになったという報告例は少ないことから、おそらくは適応進化の例と考えてよさそうである。

2つめは、鹿児島県屋久島のニホンザルにおける性交渉パタンの種内変異について。ニホンザルの雄は、マウンティングと呼ばれる交尾姿勢を何度も繰り返した上で射精に至る。第一位雄は、それ以外の群れ雄、さらには群れ外雄に比べて、最初のマウンティングから射精に至ったマウンティングまでの時間長が長い。これは第一位雄がその優位性を生かして排卵期周辺の雌を囲い込んで他の雄から防衛する適応的な行動だと理解されるが、雄はその一生の間に様々な社会的地位を経るので、こうした種内変異の場合には明らかに遺伝的変異を伴うものではない。

3つめは、ニホンザルにおける“ハグハグ”行動の種内変異について。宮城県金華山島で見られる“ハグハグ”は、2個体が対面で抱き合い、お互いの体を前後に揺さぶる行動を指す。社会的グルーミングの中断後や闘争後などの文脈で生起し、“ハグハグ”後はほとんどの場合で社会的グルーミングに移行することなどから、個体間の緊張を緩和し、スムーズなグルーミングの進行を可能にするという機能を持つと考えられている（下岡、1998）。他方、屋久島で新たに見つかった“ハグハグ”は、機能的には金華山のそれと同様でありながら、一方が他方の側面から抱きつく場合もあり、かつ抱きついた掌の開閉動作を伴うという構造的違いが認められる。こうし

た種内変異は遺伝的変異が伴うとも、適応的であるとも考えづらく、文化的変異と解釈するのが妥当であろう。

2. 「人類の進化史的基盤の考え方-集団という現象にひきよせて」

曾我亨 (弘前大学)

霊長類学者は、「群れ」のことを集団と呼んでいる。「群れ」は観察可能なサルのおつまりであり、その「可視性」に依拠しながら、霊長類学者は「集団」について考えてきた。一方、人類学は、民族に代表されるような、いわば「不可視」のヒトのおつまりも、当然のように「集団」と呼んできた。けれども民族名のようなカテゴリーによって指示される対象を集団として扱うことは、言語をもたない霊長類と人間の連続性を検討するときには望ましくない。本発表では、集団を進化史的に考えるために、霊長類学とおなじようにヒトの集団をとらえることを提案した。

集団を可視的な存在としてとらえるということは、集団を「能動的」な存在としてとらえるということでもある。人びとが集まったときにはじめて「可視的」な集団が形成されたことになるし、去ったとき集団は消滅する。なんらかの「行為が先行」することで集団が形成されるのである。人類学者は、とかく民族という先験的なカテゴリーを前提に、民族間関係などを分析しがちであるが、行為が先行することで形成される集団を観察することで、ヒトと霊長類の進化史的基盤を比較検討することが可能になるはずである。

こうした認識のもと、本発表では「行為が先行」することで形成された集団として、南部エチオピアから北部ケニアにかけて「存在」したホフテを取り上げた。1920年代に北部ケニアに駐留した植民地行政官の記録には、ホフテという「民族」がしばしば登場する。いくつかの資料から、ホフテとは、家畜とともに頻繁に移動すること（オーフテ）を意味するオロモ語を、植民地政府が誤って民族名として理解した可能性を指摘した。そして具体的には、エチオピア高地人の迫害をのがれて、ケニア側へと逃れていった移動性の高いガブラやボラナの人びとであったことを示唆した。

植民地政府はホフテを課税の対象とするほど、実在的な集団と認識していた。ところが現在、ホフテという民族は存在していない。そして、かつてホフテを構成していたガブラとボラナは、民族紛争をくりひろげている。ヒトの集団の進化史的基盤について考察する際には、こうした現在の集団関係だけをモデルにするわけにはいかないだろう。本発表では、集団を自在に形成したり消滅させたりするヒトの可塑性（あるいは進化的基盤）を前提として、比較的恒久的な（あるいは安定的な）集団について考察することの重要性を指摘した。